
キセキはここにある

ひろにか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキはここにある

【Nコード】

N68090

【作者名】

ひろにか

【あらすじ】

テレビアニメ『ミラクル トレイン 〜大江戸線へようこそ〜』の最終話をあかりちゃん目線で。最後の彼女の笑顔には、どういう意味があったのか。そのへんも自己流解釈で説明してます。

（前書き）

あかりちゃん視点で『ミラクル トレイン』大江戸線へようこそ『最終話のいくつかのシーンを書いてます。六あか・・・と見えないこともない話。ラスト2話のネタバレと、六本木ととくがわ以外の男性陣が出ないので、そのへんにご注意下さい。

不思議な不思議な地下鉄。

だって、お客さんがちつともいなくって。人に見える6人の男の人たちは、実は駅で。

あれ、なんでわたしはそんなことを知ってるんだろう？
わからない。

一番小さなおにいさんを、どうして年下だと思っただろう。
未来のわたしは、なんで今より子どもなんだろう。
どうして赤毛のおにいさんを、懐かしいって思っただろう。
わからない。ちつとも、わからない。

えーっと、わたしって何歳だっけ？

・・・いいや、とっても楽しいから。

あれ、何だか明るくなってきた。もう朝？

キセキはここにある

わたしの寝付きが悪いのは、寝癖の直りにくい髪質と同じで生まれつき。

赤ちゃんの頃は眠たくなるとよくぐずっていたと、お母さんから聞いたことがある。

でも、寝起き悪くなかったそうだ。

確かにわたしは低血圧ではない。けれどいつの頃からか、起きてからしばらく頭がぼーっとして、なかなか動けなくなっていた。

その理由が、やっとわかった。

『わたし』は、わたしに 地下鉄の中の自分にようやく追いついたんだ。

* * * *

「ガラガラだあ・・・」

小さな『わたし』が、無人の電車内に困惑して立ちつくしている。不安なのか、握りしめた手を離そうとしない。ふらついていた青年 生まれたばかりの六本木さん を支えるためにつないでいたはずなのに。

でも、無理も無い。

真っ暗なホーム。不思議な男の人。突然やってきた電車。そこに乗ったら、乗客は奇妙な格好の男女だけ。

こんなに色んなことが一度に起こるなんて、普通では考えられないことだもの。

わたしは、あの子を戻してあげないといけないんだ。現実 彼

女の人生へ。

でも、どうしたらいいのだろう。自分とはいえ、向こうはそんなこと知る由もない。初対面の人間の言うことを聞いてくれるだろうか。

「安心して。ホームに戻れば平気だから」

不安を和らげようと、笑顔で、出来るだけ優しく声をかける。すると、昔のわたしは顔を上げてこっちを見上げた。

そこで、視線が交差する。

目と目が合った。

その瞬間、もやがかかったように朧げで、思い出せなかった記憶がふつと甦る。

そうだ。わたしはここで、きれいなおねえさんに会ったんだ。

不安な気持ちは、その人の優しい笑顔に不思議と収まって。それから

おねえさんは、わたしと手をつないで電車から一緒に降りてくれた。

そっか。そうすればいいんだ、と理解する。

六本木さんの方を見ると、うん、と頷いてくれた。わたしが帰り

道を見つけたことをわかってくれたのだろう。

立ち上がる時に取ってくれた手から、この人の気持ち伝わってくるような・・・そんな気がした。

でも。

次の瞬間、六本木さんは、そっと手を離れた。

わかってる。この人は、わたしのことを思っでそうしてくれてるんだ。

わたしは、今ここでこの電車　ミラクル　トレイン　を降りないといけない。

そうしなければ、わたしは現実に戻れなくなる。

ミラクル　トレインも暴走して、仕事が出来ない。

それはつまり、困っている人を助けることも叶わないということだ。みなさんも困ってしまう。

それは、ダメだ。悩める淑女の手助けをするのが、この地下鉄の使命なのだから。

恋した人のため、一生懸命鉄道の勉強をした少女。

大好きだったお父さんの死を、お母さんと一緒に乗り越えていくと頑張っている女の子。

可愛いものの好きの自分を受け入れた男の人。

親友と離れるとしても、自分の道を選んだ占い師さん。

恋人を突然独りにしてしまったことを気に病んでいた、幽霊の女性。

他にもたくさん、悩みを抱えた人たちの力になってきた。
わたしが大好きなのは、そんなミラクル トレインなのだから。

意を決して少女の手を取ると、記憶通り怖がられたりはしなかった。

開いたままのドアに向かって一歩踏み出す。すると、不意に足先に何かが触れた感触が伝わってきた。

「これ・・・」

開いている右の手で、足元のそれを拾い上げる。

ピンク色の帽子。わたしの・・・ガイドの帽子。

電車が止まる時の衝撃で、頭から落ちてしまっていたようだ。
かぶるうとしたところ、足元のもう一つの存在に気が付く。

「とくがわ・・・」

『行きな、あかり』

別れの挨拶をするかのように、黒い毛並みの小犬は「わん」と鳴いた。

つぶらな両目がじっとわたしを見ている。

犬のこの子は、おしゃべりしたりはできない。けど、妙に仕草が人間くさくて・・・実はわたしたちの言葉も事情もみんなわかって

るんじゃないかって、わたしは密かに思っていた。

手に持っていた帽子をそっとかぶせてやる。

思ったとおり、サイズは全然合ってなくてぶかぶかだった。頭がすっぽり埋もれてしまつて、前がほとんど見えないだろう。

しかし彼は大人しくされるままになっていた。

「ありがとう」

世話をしていたのは自分のはずなのに、何故かそんな言葉が出た。この子の存在を、心のどこかで支えとしていたのは確かだけれど、でも、このお礼の言葉はそれに対してだけではなかった。上手く思い出せないのだけど、このとくがわに助けられた気がするのだ。

もしかすると、わたしが思っている以上にこの子はすごいのかも
しれない。

それならちょうど良かった。頼み事をするにはもってこいだ。

「その帽子、今までのお礼にあげます。大事にしてくださいね」

そう言つと、機嫌のいい時の「わん」が返ってきた。『おう、任せときな』って感じかな？

身体が揺れたことで、帽子が傾き隙間から瞳が覗く。
わたしはそのとくがわの眼をじっと見つめた。

「お願いね」

この言葉は、帽子についてではなくて。みなさんのこと。みなさんが頼りにならないってことじゃない。みんなとっても優しく、記憶の無いわたしはすごく助けられた。車掌さんだって、みなさんやミラクルトレインのことを何より大切に思ってた、懸命に守っている。

心配することなんてないのはわかっているけれど。

でも、もう一緒にいられないわたしの代わりに見ていてほしくて・

・

それを聞いたとくがわは、黙って頷いた。・・・・・・・・なんだか、ほんとうにわかってるみたい。

思いにふけていたら、左手をくいと引かれた。

いけない。

幼い自分が不安気にこっちを見上げていた。

「ゴメンね、すぐ・・・」

謝ろうとしたら、彼女（自分なのだけれど）は「うつん」と首を横に振る。

言いたいことは、ほったらかしにされたことについてでは無いよ
うだ。

その目は、まだ覚醒しきっていない青年　人の姿を得たばかり
の駅　を見つめている。

「・・・ねえ、あの男の人・・・」

その心配そうな顔に、励ましの言葉をかけた。

「大丈夫だよ」

満足に立ち上がることもできない青年は、六本木さんが支えてく
れている。

「でも・・・」

まだ心配そうな少女に、こっそりと囁く。

「また会えるよ。あなたが大人になったらね」

ダイヤグラムが歪まないように、車掌さんがどうにかしてくれるだろう。今にも消えてしまいそうな彼だけど、未来で無事にいる。その彼と、わたしはずっと一緒だった。

先のことになるけれど、わたしは無事この人と再会できる。それは絶対なもの。

え、と瞳をぱちくりさせるかつての自分に、わたしは自信を持って笑いかけた。

「さ、帰ろう」

「うんっ」

少女は素直に頷く。

これは大人になった今も直らない、わたしの癖。本当に納得した時は、つい「うん」と返事をしてしまう。

さっき六本木さんにもそう言っちゃったけ。

小さな手を握って、わたしはドアへと目を向けた。

最後のつもりで振り向く。まだ、六本木さんにはちゃんとお別れを言っていない。

・・・お別れ・・・。「さよなら」って言えばいいの？

違う。わたしが本当に言いたいのはそうじゃない。一番、伝えたいことは・・・。

「ありがとう」

届いた声に、はっと顔を上げる。

六本木さんが、真っ直ぐにわたしを見ていた。

「本当にありがとう。僕をここに連れてきてくれて。僕は、この、今の自分の生き方がとても好きだ。仲間がいて、困っている人を助けることができる。出会えた人たちが笑顔になってくれた時、本当にうれしい」

彼は、かつての自分に目をやった。そして続ける。

「でも、一人じゃここに来れなかった。この人生を見つけて、生きていけるのは、あ　君のおかげだ」

名前を呼ぼうとしたけれど、過去のわたしに聞かれないよう言い直したみたい。

ちよつと不器用な、そんなところが六本木さんらしい。とっても。

「だから君にも、君自身の人生をちゃんと生きてほしい。笑って生きてほしいんだ」

真っ直ぐわたしの目を見つめて紡がれる言葉。

普段はあんまりしゃべらない六本木さんが、懸命に心を伝えようとしてくれている。

それがわかって、すごくうれしかった。
だから、わたしもこう返す。

「
ありがとう」

そうだ。

これが本当に伝えたかったこと。

記憶は戻ったけれど、何だか実感がなくて。それに、ミラクル
トレインの中での毎日があんまり楽しくて。

だから、この場所を守るためなら、記憶を消されるのも仕方ない
って思った。

でも外の記憶が無くなっちゃったら、六本木さんとわたしが昔出
会ったこともまた思い出せなくなっちゃう。

それは 悲しい。

そんな大事なことを忘れてしまうところだった。もう少しで。
だから、お礼を言わなくちゃ。わたしの大切な思い出を守ってく
れて、ありがとうって。

それに、「さよなら」はおかしいって気付いた。

『わたし』たちはまた出会う。

そして『わたし』はミラクル トレインのガイドになって。それ
から

* * *

列車はだんだんとスピードを上げ、ホームから遠ざかっていく。わたしは少女の心の一部となって、その景色をじっと見ていた。

その地下鉄の進む先は真っ暗で、何も見えない。でも、わたしは知っている。そこに、ちゃんと線路が在るんだって。

あの電車の行く先は、未来。
大勢の人々が日々を生きる東京の街。そこで困っている人の力になる、そのためにここより発射したのだ。

そして、その線路は『わたし』の未来とも繋がっている。

追いつくんだ、『わたし』はあの列車に。

長い時間はかかるけど、それでもと。

そう思った途端、睡魔が襲ってきた。

そっか、でもそれまでは眠らなくちゃ・・・

不思議とそれがわかった。

わたしはこの子　過去のわたし　からすれば、未来の記憶を

持ってしまっている。

心の中で好き勝手しては、きっとまたダイヤグラムを歪めてしま
うだろう。

だから眠るんだ。20歳のあの日まで、この子の中で静かに時を
待とう。

あの、奇跡の電車での楽しい日々を、夢見ながら。

* * * *

それからずっと夜の眠りの中で、わたしはみなさんとの思い出を
振り返ってきた。

それは何度繰り返しても飽きなくて。

でも、朝になっても余韻から覚めやらず、過去の『わたし』は起
き抜けにぼーっとしてしまふようになった。

起きると同時に、夢 未来の記憶 は再びわたしの中に仕舞
いこまれる。

そのせいで、昔の自分を少し困らせてしまった。低血圧でもない
のに、急に寝起きが辛くなってしまうたのだから。

けれど、それももう終わり。

* * *

今日は休日。

会社へ行くわけじゃないから、目一杯おめかししてきた。

だってみなさんは、この姿のわたしはガイドの服しか知らない。
だから、大人っぽくお洒落したところを見せて、びっくりさせち
やおうつて。

・・・つてダメダメ笑ったら！ わたし、変な人みたいじゃない
い・・・普通に普通に。・・・あ、いけない、通りすぎちゃっ
た？

足を止めて、くるりと振り向く。

実はちよつと緊張してるんだけど、それを顔に出さないように・
できているのだろうか？ ちよつと自信が無い。

だって、あつちからすればこの間のことでも、こちらからすれば
すつごく久しぶりなんだもの。

懐かしい気持ちで胸がはちきれそうだ。

みなさん、お変わりありませんか？

都庁さんは、やっぱりおでこの広がりを感じてますか？

新宿さんは、相変わらずお客様に優しく声をかけてますか？

月島さんは、今日ももんじゃを焼いていますか？

両国さんは、江戸っ子気質で威勢がいいままですか？

汐留さんは、今も子ども扱いされてムキになっていますか？

車掌さんは、謎の仮面を外さないでいますか？

とくがわは、わたしの帽子を気に入ってくれましたか？

六本木さん、「ドンマイ」って言ってくれた、あの頃のあなたの
ままですか？

……きつと、そうなんですよね。何となく、わかります。
あなたは、あの時の言葉を守ってくれた。

わたしを励ましてくれましたよね、「僕はいつもここにいる」っ
て。

本当だったんですね。

でも、わたしもずっといたんですよ。過去の自分の中で、目覚め
の時を待っていました。

ダイヤグラムを歪めることなく、みなさんに会えるように。

とてもとても長かった……けど、ようやくこの日が来たんです。

振り向いた先の正面にまっすぐ顔を向ける。

普通の人にとっては、そこはただの壁でしかない。でも、わたし
にとっては違う。

うれしくて、思わず顔が綻ぶのがわかった。

見えますか？ わたし、笑ってるでしょ？

この笑顔は、あなたのおかげなんです。

ねえ、六本木さん。わたし、ちゃんと覚えてるんですよ。

終わり

（後書き）

最終話を見た勢いで（その頃から使ってたアメブロの方に）書いてたら、話そのものより最終話の考察の方が長くなっていました（笑）。それはともかくこの後の六本木さんとあかりちゃんは、時々会ったりするのも幸せでよいのですが、互いの思い出だけを胸に同じ街でそれぞれの人生を生きていく、というのも美しいと思うのです。・・・幸せなのも良いですね！（念押し）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6809o/>

キセキはここにある

2010年11月3日06時45分発行